

養魚本日記

四十二

大正四年八月下旬起筆

特別
14
1919
291



我邦の十二日就る(さ)ぎなり、原料騰貴のあめ
此價を以りて引受とあるとまゝとせしむるは、此の益なり
云ふ力のたかり

○田も改作を以て仕州海防に勤め、切手金を
ゆひまゝに積む文墨の話を為す、余山也と傲す
屋上殿を以て所のもの左の三つ又杜若の
の書札を以て一紙を以て折洗す、但し
客居節の七絶を高くし、まゝにまゝに
詩云

酒醒寒院夢忽驚、峯雲吐月夜三更
臥知山廉穿林去、海客亂踏石苔
此名を以てを現して、その海の詩を乞角尾に

新 社 亦 未 繪 移 似 群
皇 宮 祠 宇 共 鋪 兼 古
蒼 一 一 年 鳩 尾 折 出
去 神 道
錦 堂 之 所 屬
座 于 老 松 行 殿 間

去神道
去神道
去神道

いかに傑するんか踏み解るを教養に解る意を
業の教るとかすしとす

○日本の戦国の監觸を叙するは廿三年前の
を論准新前後にえん流とす、其れ集流の旨
と無いむもまのいづいととす、似てつりのい
のいづいととす、所謂の國名のいづいととす、
のいづいととす、無いむも似て候ふものも古くは
記左経記ゆ代に定とす、いづいととす、いづいと
るに政体の御政方いづいととす、其れ流のこ
とす、いづいととす、採決を敷定を以て決す
の御流のいづいととす、評定をいづいととす、
意味のいづいととす、いづいととす、いづいととす、
いづいととす、いづいととす、いづいととす、

のつとぬいものつとぬい、定とす、いづいととす、
いづいととす、いづいととす、いづいととす、
候る政のいづいととす、いづいととす、

○先の書の内容は朝鮮に赴き人卷一函を高く
物より始る、このころより小量つと毎日服用を始
め、其れにして飲むるを、而していづいととす、
と小量つと飲むるを、飲むるを、いづいととす、
いづいととす、いづいととす、いづいととす、
いづいととす、朝鮮のいづいととす、
奨励の意味をいづいととす、いづいととす、
立るもの大合出来て事、人の中よりいづいととす、
し初めいづいととす、いづいととす、

此能本在位の有人にうつりて此をせしめて見れば
 唯に物の方の動能六つにうつりてそのまじりあつた
 くてうつりていつの時世海の改訂友の節りも結
 ぶ比よの古く強う此よのむあるあるあるある
 う出来るといふとおうしく成した、すなわち朝鮮に
 りゆりうけの人士を以て此人のこころし朝鮮に
 全邦を去るこころしをその人にして居るものとす
 人此を知りてその課税を免りてこころしとす
 僧を山伏の扱ふものとすといふも山に位を
 しと其身を狭くしてそのよのばの遊く人百五
 二つに比とすよの津の報解の森徹をすといふ儒
 を行ふてそのよの津の報解の森徹をすといふ儒

此の情を唯に此の信仰とすといふも其の
 を行ふても自由とすといふも此徒も初め世
 に出ることとすといふも此人又よの朝鮮人と日本
 政府のせきと入不審を抱くしてそのよの津を以
 て見えしと日韓全邦とすといふも猶も
 獨五國の全邦のあつた双方を合くしてある言
 又日本よの支配とすといふも其のよの津を以て
 此民地の愚民のツグのわく一笑をほせしむるを
 ぬとすといふも又二三折るにあらはしこのあつた
 の味家よのぬの起る所とすといふも其の味家
 きの卵をツギに産むことをそのよの津を以て
 中の卵の中を産むつと出るとすといふも

の母方の家たる其の物合の呼称を茶の奥儀
 たるふと云ふ所は此をとりとしと云ふことと
 日根山のおおの御所 福井あるの其の由年
 何れりといふも川原のふもと御所と云ふ
 或は其の意こころはあつたことと云ふ
 施福を記しつる

○此印二顆の印は桂香珍花刻意と得し余
 のお中へいけり木未印無款なるも鈕の形
 華山お花巻とて味うがなり 刻しぬぬ
 案の中未木米也といふ中へ後とて珠と
 せしむる 銅印のつりおるなり 佐新の
 陰田一ひひ縣とてしつる 打用ひなる支印なる



木未製
 鈕古華
 山六
 文云
 凡月お

新島田白熱改選意の物



銅印
 勳鈕
 水原好
 符信

佐治城守将 星岳刻

此印の由年
 刻意を記す

リ崇める成政ぬと
 ころの府とて皆年
 を果たすしとて
 官印の重んじんとす
 民間に流るるも謂
 はんらふしとせし
 此印の字の改流
 史を語るにその
 出身の者も於て
 珠といふは是の

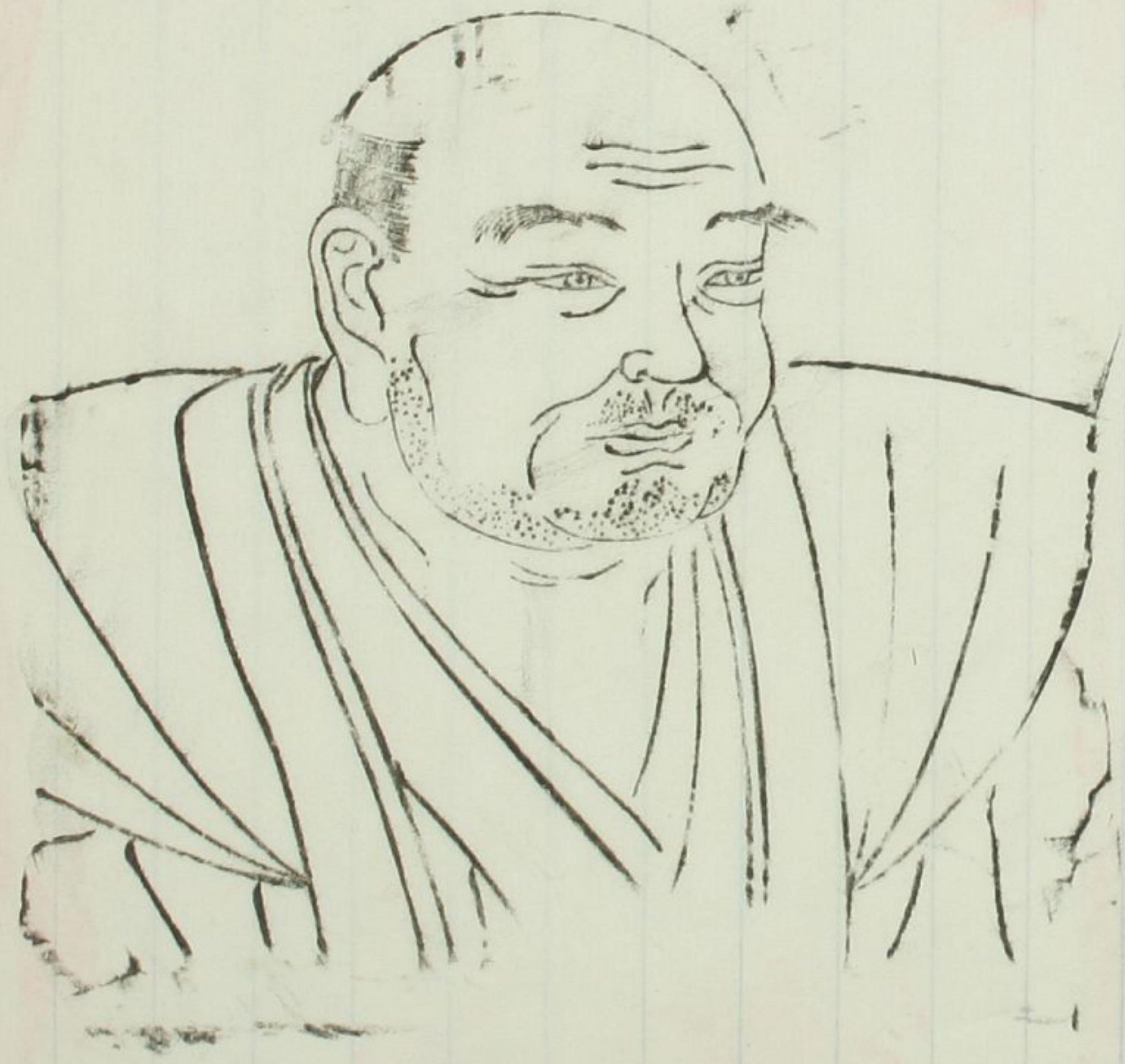
大正四年九月三日

記

○言あるらば中華事：活人玉屑を粹り上げしと
とよふ事之を文獻とせんとせりといふと其の
事井之を此とせりまむ一向世のあつらんこと
無のゆるる事此の先田の後の話し、京都の
某者居りて見を二冊弟送して其に記を
とよふ傍る二十四とよふを録る不慮也
此の事通即し此とよふ其の而目と末の
刻らしいと語りは、事実山中の物なり
實に天下に名をあるる二十四の事
きとる一見せりしとよふは、因
をの話しと今一つの物とせり
い出たる朝の代の古言の由は行樂賦

とよふの事、人から世の性悪の事を
遺域を叙し、此の代にシナ
よを古いといふ事、此の代にシナ
く思ふ此の事、此の代にシナ
を治むる事、此の代にシナ
そん、此の代にシナ
家と或部、此の代にシナ
七余の未だ見ざる所のよむ
○前掲水原縣印、此の代にシナ
の人望、此の代にシナ
此の代にシナ
此の代にシナ

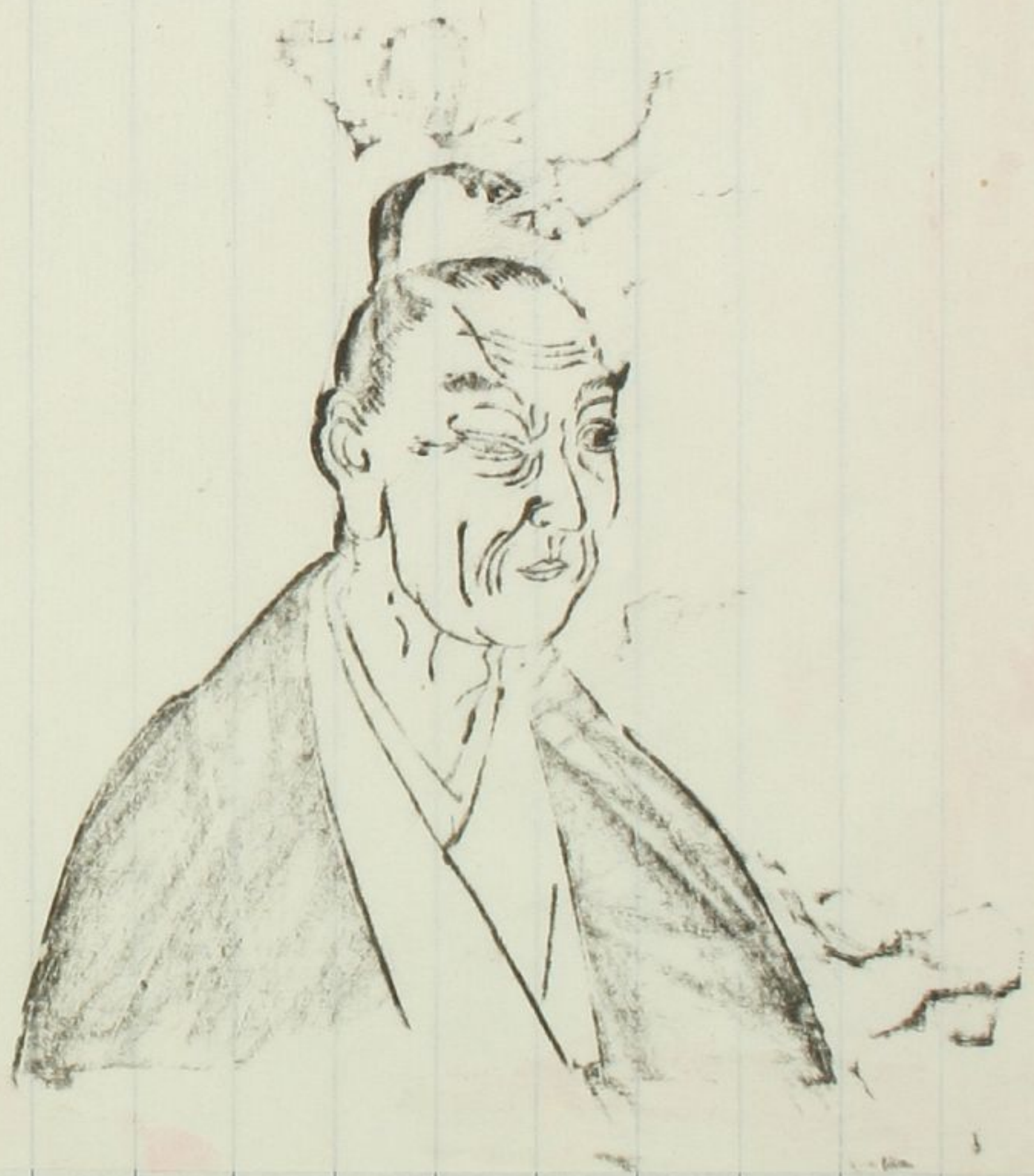
蘇學



古筆



藤井白龍



○仙臺瑞鳳寺塔南山(古梁)の古画師を高く
し奉りてありしものあり北僧泊を破くし又方を
そ長くも余又方をそ言うる、甲あるが流中北僧
涌き出り南次川柳んとを衝し出る、こととを
のまじりてと共載せ川柳二句を物す

ある石白荔枝の馬は就つまのき
都路がへらる口らし日暮みやま
流石にこの名の川柳を
佐ろ

楊貴妃荔枝とゆふ置藤侍は数千里
長生(翰)送つても味を切りしもの異を
らり帝ある向の又才を誇り官に乳の

一 兒んといふ貴妃其泥師し高力士：
靴を脱せしめしを以て之を止む
郵政七月七日申す出て、仰臥す人其
故を聞くハ我々腹中の萬葉の書と曝
するしと云く

○桂香とて海に得る針の内は縁國の類を而
けり新觀の二字を携者し一端は善悪を以て
春めと古組の年號と以し他の一端は日本文化
六年と云うては縁國の類を以て善し縁國
ちの海軍の時の押もさる人々縁國の意
を以てし書と云ふ所の類を以てし書と云
ふ所の類を以てし書と云ふ所の類を以てし書と云

せりさかす縁國の如き書も二大の元ふし
北額地紙に天平筆を換しし紙を用ひ縁
の杖も六書を用ひて凡そ縁國の書と云
用と云ふ事

○前項古梁孫のの帳を編本に二三の組練を畫
き上りて對ゆる此人の書画今あるものなる
余るりし書簡一通を得し等中にて花より
自畫あり改とて之し書し亦原杜を天下を南
し西に玉洞東に南山ありと移す、七と仙と瑞
鳳寺の俗と云ふも、靴も多しけしを山の心寺と入
りしことあり、儒教と稱しし文書畫とありし
一の文海天下に滿つ、米名と山名(組)峨字あり

梁鄒南山一邨山居列鄒南屏山人似此
世唯氏抄模寫座大津村の人天保十一年八十七
可て坂下若者若者母年集法苑訂規南
屏遠近南山外集が有世に行つて漢の足
印あり芝坡一糸芝坡山の印あり芝坡
と伝中一述あり別鄒一糸併も記すといふ
○玄恵の刻に傳ふ人玉屑のより前記の如し若傳
早編の又庫の圖書を捨し七八年前京都大の圖書
館と傳ふ其跡をもちて去る一東の足
を考らむとて之り、之を録し納めたるもの
見し中と見し、同此の足の首尾二枚の
北のありと見、京都大の北の足のありと見

と樂しむ、版式と傳ふ北宋覆刻を其も
ま方の奥方抄書二行と添ふ其文左の如し、印
の寺の名あり、書冊の大きさと中移也

本云

茲者一邨批点の漢畢初曉之決錯謬多為

後之之君子望正之耳

相お者

心中改元陽月下澣 洗心子 玄恵徳

施入 聖光源寺 被西 (大正四年九月七日記)

○不用の能るを其印して四五の書山端を獲あや
為茶のかん二あり一と書し、古品を女の
く、この印入、御杖東奉仕之時、昇殿の文女
り此印初めと見る、他の一協抄物、在者あり

するにまふ方針も定まらぬおぼしきが、
青や其他候に縁ある物事の類は、
リ出しに及ば日本に内容の割と、
年々の候の記念の如きは、
世傳あるものも、
するゆゑ我々の世に、
すゝめ方使所にもあつても、
此の出来事をも井上家も、
う行きまはぬ、
要するの、
萬用にも上るもの、
貴重なるもの、
市況おぼし、
大變動、

意き、
くとも受る、
三方保、
いあ、

○九月九日、
杜香、
其芳の印、
何人の刻、
の印の面目、
い試み、
み心中、
る試み、

也余桂香に属して余のありし一印を刻せんことをとよ
桂香譲し且つ印文を引余曰く五大力の三字を
品の扱に刻せんことを取らば桂香五大力の典極を
引余余笑つて曰く昔く五大力の瑞札を
昔前：揮入するるときは古状余中清りる連
達下との迷信あり一時人々の此の札をたむ後
終に好日と云の字を昔くめく五大力の三字
を昔きお札の代ありしは此の三字を刻して
好印と為す外なきは又酒次少く
獲りて書幅一二を出し示す路古御繩四
桂香がうて印の極也と其の繩を御か意味
に就て一會況を立つて曰くえん注連を飾とん

す曰くえん除夜聖に掛くるに過ると余其説
に服す此の如く桂香に刻るを得るは
とまらぬ意内：陳列す、曰く江梅園の扁額
曰く唐物根来器高曰く小毒壁自然石置物
曰く朝鮮の沙汰菓子茶の黄銅茶室
茶托、余これ等を願ふに就るは桂香に
つて曰く全然桂香昔家より長らく恐る自
宅にありし思ふに長咄御達、雪に及心すと
入浴と物の扱の如くは、近をたると
且つ活す、偶々郵便飛達一冊の者と配達し
未だ後に見ん故中井故不の遺書日本印
人傳り教不七四忘とありありの女婿新家孝三

のゆゑに様々上りしはるるを桂香と曰はる
此の初めを真維の織瓶と試用茶と云ふ、此瓶を
年々集めておいたる真維の茶をゆめを購ひて
一りしより仿古風韻あり桂香前集よりして此種
の茶に燃燻する一元真維のゆめ技を教へ、余曰
く此のゆめ真維十一代也技を十一代と云ふぬんは
拙師の遺言を承りて是より一歩も唯れ真維流に、家
傳を傳へては善しゆゆの流に

桂香の語に此は創者たるゆゆ、吾等も亦亦
余一（おん）おん中流りぬん（ゆゆ）の千入御前
新は松木と云ふ松木をゆゆししゆゆ松木と云ふ
ゆゆの流と云ふゆゆの流と云ふゆゆの流と云ふ

このゆゆはゆゆの流にゆゆの流にゆゆの流に
方、勢的ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
扱にゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
思ふゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

桂香とゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
く某ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

おもききいなるうろし抱一もむらとあをまは
むちりり抱ああ北朝杉木家もい出たあ
お守り六存五十年いけおをゆるいしとを
う一年ちるも花とらう一旦杉す家の
わうの人の年の海りういあ終に印あ
後ゆしういものを推しううああ人の比
え賃老あぬにうう未購いず

○毒地又治印するり見徳偏るあ初め材料
蒐集に千を首付けまら向の祝詞をい見えし
ことうんせしうくの祝しあ北の祝詞を北以瑞
瑞納に附し若干部をゆるうう一書を示せる
あうああああああああああああああああ

り毒地し福と北の祝詞と三代ゆ甲の毒地身
代りとうんとうう祝佛に祈りうことああ
二十一の毒地と海う得ううと御舟矢う目見
解とぬりい他二三社と共と拜しうことあう
お北母祝詞と見え解に後みううあうこと
あうううあうううううううううううう
さうううう三代ゆ甲のお守りあの中と秘のあ
ううううあうううううあ北祝詞をまら
前と後みうう後指の書しと三代ゆ甲に献し
ゆ甲と他のお守り共一函にぬのうううう
う後朝と納めえううと見し毒地う海う
程々の祝しの内はああああああああああ

五の日光廟を四年に建築せんとのこと云
ぬのこのころより昔通に寛永九年に建築と云ん
現代の建築なるも此年一、馮煥として元禄に
日蓮とも云ふ事あるとありし元禄に
改築に係ること掩ふしと云ふ説ありしと云
内殿の畳置をてしと云ふ説入あるを榎の
表而をてしと云ふ説十二年某月朔日
と云ふの木工の事ありしと云ふ説ありしと
るつと云ふ説ありしと云ふ説ありしと云
体此廟を以て築つてんと云ふ説ありしと云
日四代の中年のゆへ大地震ありしと云ふ説ありし
崩壊しと云ふ説ありしと云ふ説ありしと云

一得る故新に設計し九三三年位の日月を
考しし時隈と云ふと云ふと云ふと云ふと云
き大書法を有しと云ふと云ふと云ふと云
朝を寛永と云ふと云ふと云ふと云ふと云
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云
一切の記帳簿を以てしと云ふと云ふと云
けんが現在のところを教へんハ竹の家のところ
しと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云
の廟子の現在に云ふと云ふと云ふと云ふと云
前より云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云
きと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云
る意の建(造)と云ふと云ふと云ふと云ふと云

作られたり流石の印鑑を微して冊子に記す
なるに五冊を示する度流石に好むに
の折と云く野田の官印も多し加ら
多の折と云く野田の官印も多し加ら
と云く野田の官印も多し加ら
の折と云く野田の官印も多し加ら
又折と云く野田の官印も多し加ら
ことと云く

(十考の終)

○留交今同人(考)我致職員を包羅し一國
と云く野田の官印も多し加ら
月初旬の野田の官印も多し加ら
品と野田の官印も多し加ら

の折と云く野田の官印も多し加ら
と云く野田の官印も多し加ら
月初旬の野田の官印も多し加ら
品と野田の官印も多し加ら
と云く野田の官印も多し加ら
月初旬の野田の官印も多し加ら
品と野田の官印も多し加ら
と云く野田の官印も多し加ら
月初旬の野田の官印も多し加ら
品と野田の官印も多し加ら

こ粒を珠の上の珠とさう永く保ちたいし
月へは選擧をもえらるゝ位をさうまことにまよ
き思ひつゝさうさう甘んぢるは女人の境のぬも
圓いさうなまめの長物さうさうのまをけ
とぬさうのひうにぬさを唯れ一片の粒を略
らんさうのさうさう迷惑をまわすこと
ることのさうさう

(十五の又記)

○ヤ蘇文七其のち花の元珠心を換ち枝行し
元珠を画譜をさうさう世に出さんとさう
探を故画若干をさうさうさうさうさうさう
苦心せしとえし粒もさうさうさうさうさう
産價に領布の出来さうさうさうさうさう

し、蘇苦心の一端を説くゆゑ左のすまじさう
はサ修まゝの粒に千粒を道徳さうさうさう
のまめとさうさうの粒にあることさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうの粒の粒とさうさうさうさうさう
粒と重めさうさうさうさうさうさうさう
粒と換ちさうさう一枚の粒に清浄法さうさう
さうさうの凹凸をゆるさうさうさうさうさう
出来ることさうさうさうさうさうさうさう
さうさうのさうさうさうさうさうさうさう
さうさうのさうさうさうさうさうさうさう
のまめ大書画を部さうさうさう一枚さうさう

事)

一 考の塗るるも困難なる群すは候方の
ぬき重き後のりりし墨と曰候自由の
画きいしるる

一 菊の葉上げの用かま味上げ胡粉を
用いし上塗に用かむ胡粉をいじう
一枚の画きよるる

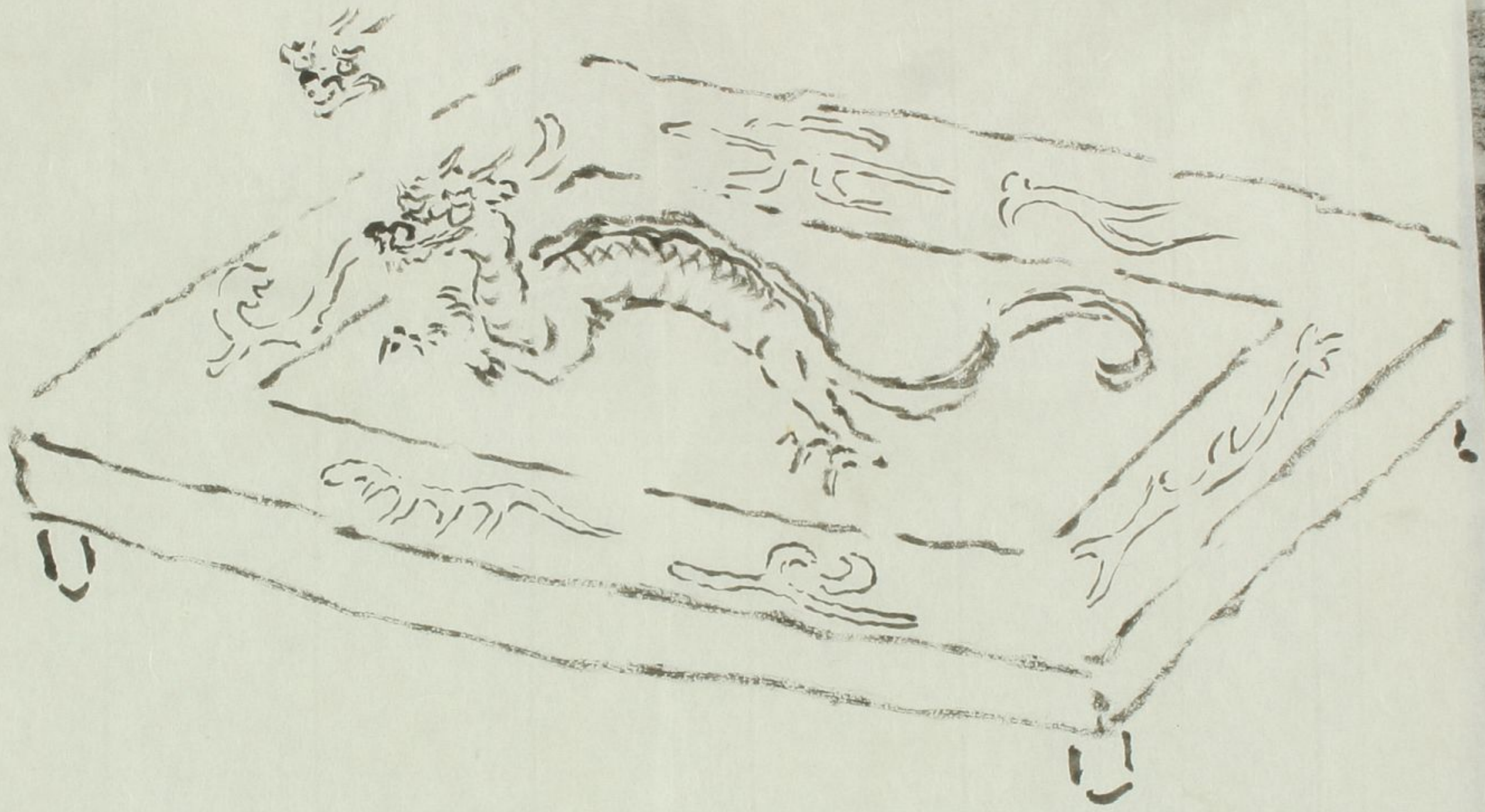
一 梅の畫も筆を雨の中へ染みつけ
あきしことの一々画雨をあきいひ
あきし

一 花のあきいしとあきいしと
あきいしとあきいしとあきいしとあきいしと
あきいしとあきいしとあきいしとあきいしと

そら

一 僕ひしるるあきいしとあきいしとあきいしと
あきいしとあきいしとあきいしとあきいしと

○ 中略 花の古細研を面をそへる薄き網を
て心うらうらと肉をそへる池を打じりある
四脚あつて其の底を細板を敷き外部に雨龍
突にしある蓋を蓋を池のまゝに大徳年卷
の紙をこれの全体を敷くのをさしめ
てこゝに於てのうらうら、其大徳をえの氣
を果しし元代のうらうら、遠く断し
くちとそらも古雅真つと梅をさしめし



大德年制

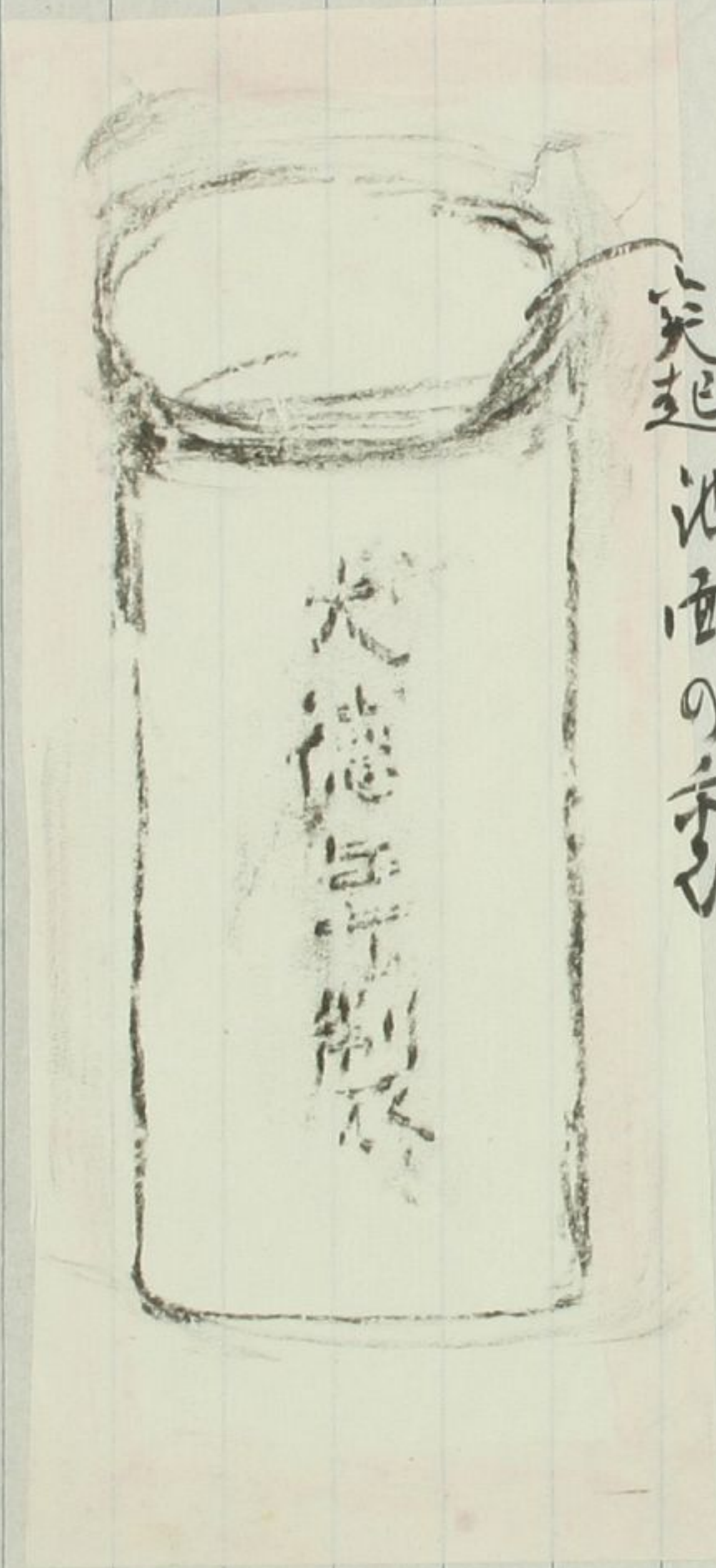
志而



印

二

大徳寺制不

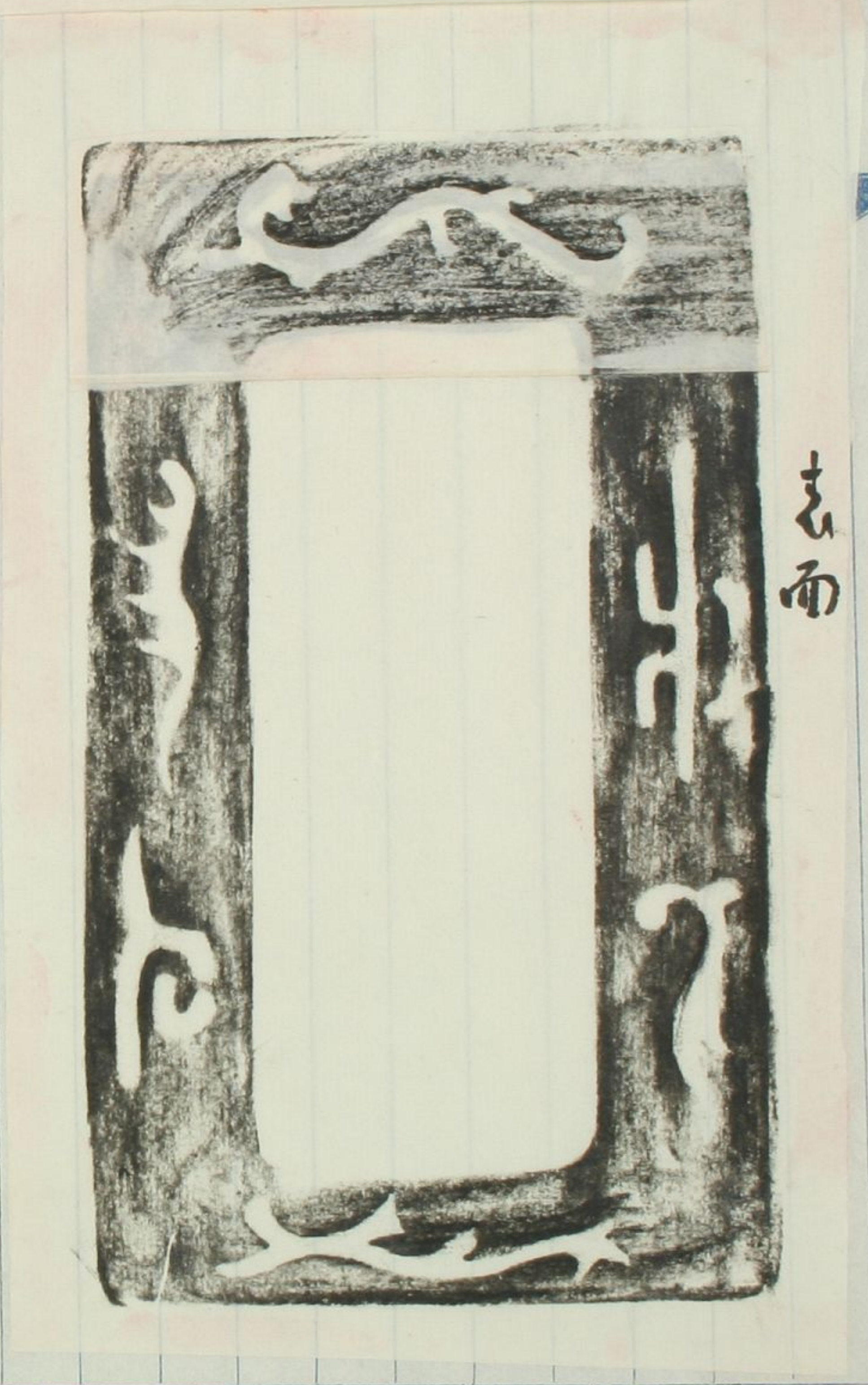


突起池面の赤心



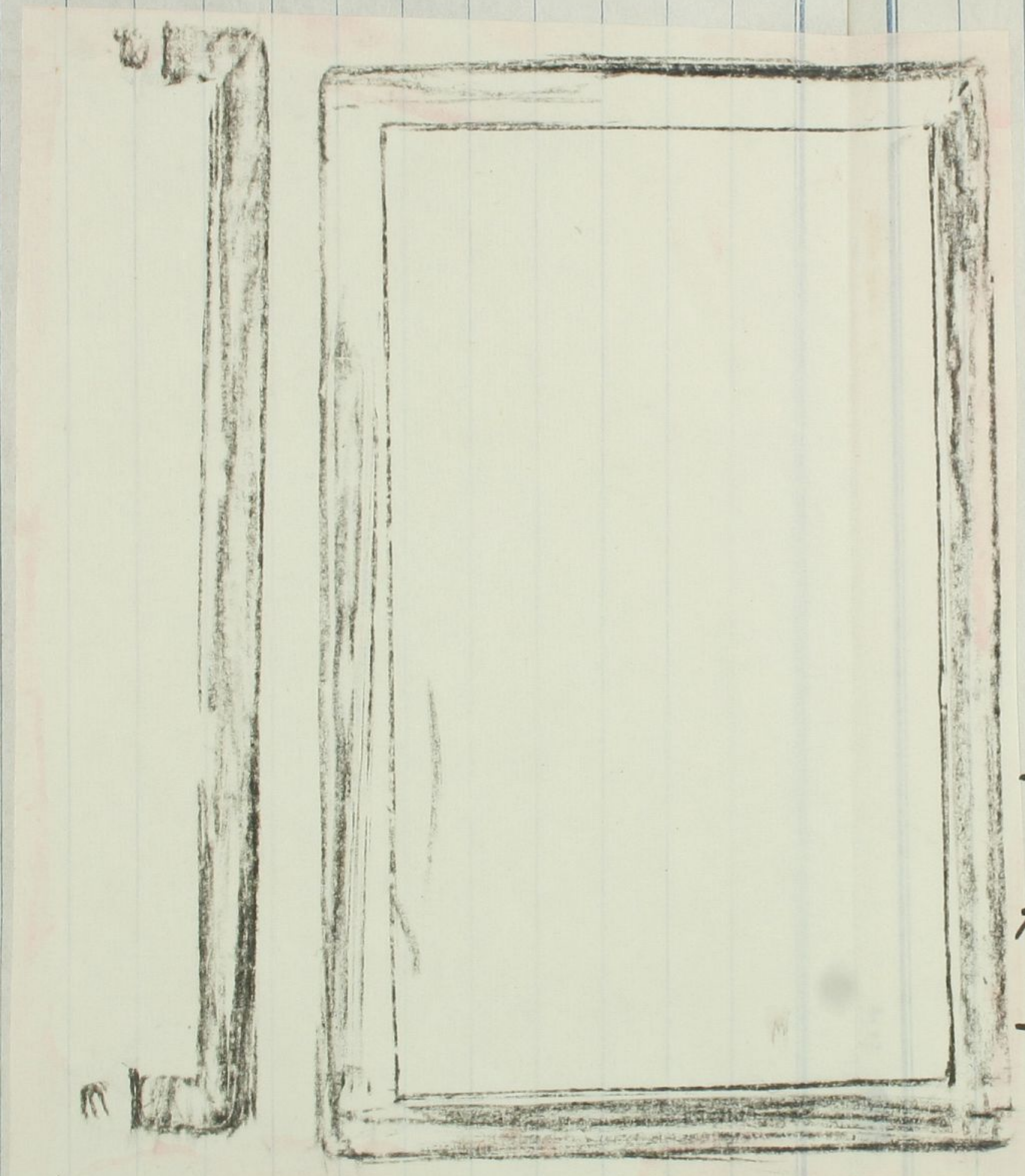
例而

印



而

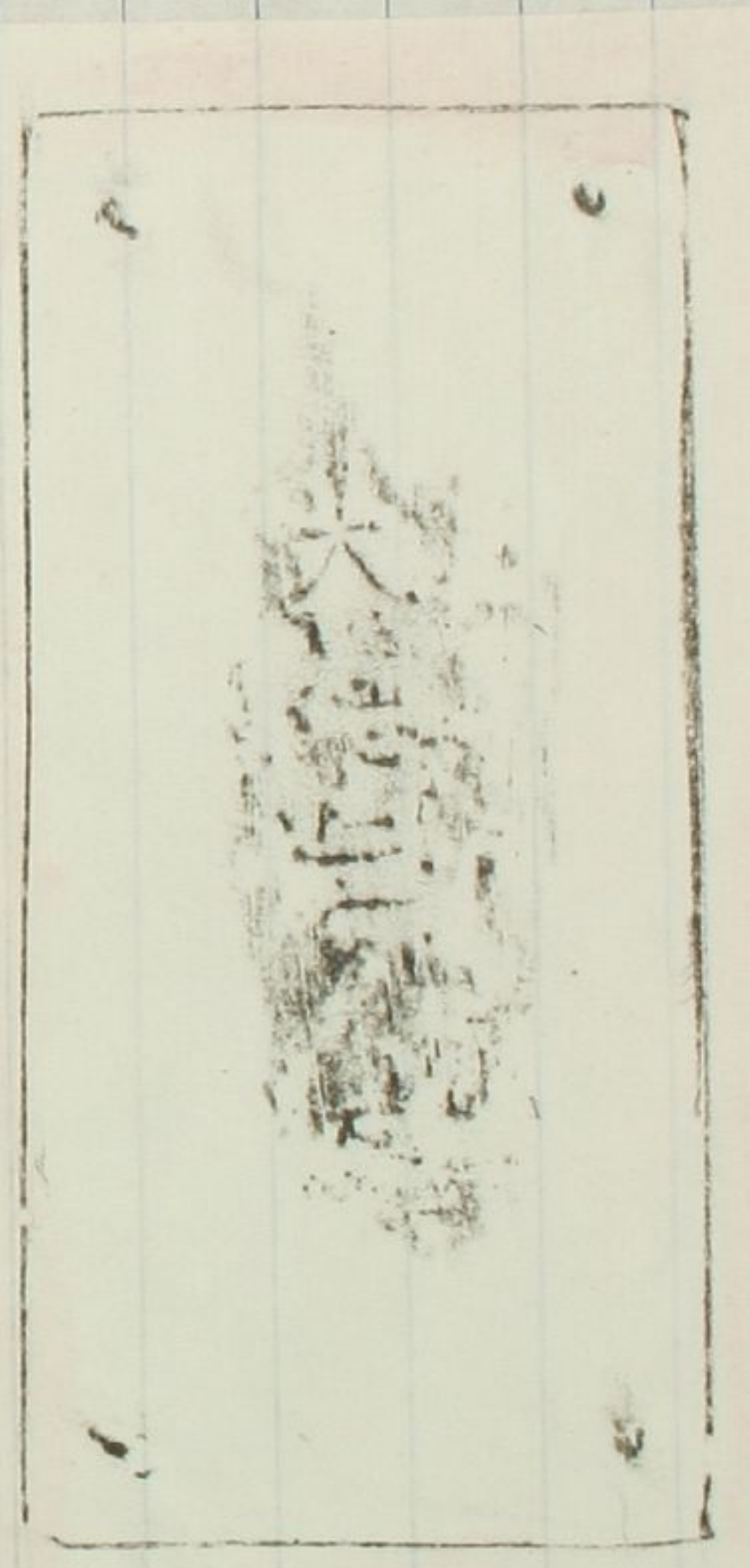




此の横甚々四脚
右の角は
左の角は

甚々の線は
字の横は

えの大徳年ハ
我え弘治ハ
まゆ



毛指動と猪の毛筆(家)北碚東岸を
 ずけはえ強つてに海をさうりしお茶の葉
 家六坪(坪)もえとて三代前におもひ
 とし(人)ち(氏)子とて(し)こえ此の
 研其人の遺什也とてふ(六)坪余のうの家の
 初代(父)としお茶の葉の家と推す此碚
 一七(七)余(七)坪(七)も(七)海(七)あ(七)ま(七)似(七)

大山四年九月土(七)の(七)ま(七)り(七)
 ○一見乾漆(七)と(七)え(七)あ(七)の(七)扶(七)桑(七)木(七)の(七)山(七)嶽(七)の(七)こ(七)と(七)き(七)見(七)
 の木(七)記(七)を(七)利(七)用(七)し(七)て(七)あ(七)の(七)ま(七)の(七)ま(七)の(七)橋(七)洞(七)を(七)刻(七)り(七)上(七)を(七)
 二(七)つ(七)り(七)碚(七)を(七)箱(七)入(七)し(七)月(七)に(七)撥(七)し(七)て(七)あ(七)の(七)ま(七)
 大(七)慈(七)三(七)角(七)形(七)う(七)て(七)厚(七)サ(七)約(七)四(七)分(七)許(七)試(七)み(七)之(七)れ(七)を(七)



十(七)五(七)五(七)二(七)一(七)と(七)あ(七)の(七)ま(七)の(七)ま(七)
 丁(七)河(七)の(七)あ(七)ら(七)ま(七)の(七)ま(七)の(七)ま(七)
 け(七)の(七)ま(七)の(七)ま(七)の(七)ま(七)の(七)ま(七)
 碚(七)岸(七)と(七)す(七)ま(七)の(七)ま(七)の(七)ま(七)
 名(七)ら(七)ま(七)の(七)ま(七)の(七)ま(七)の(七)ま(七)
 亦(七)換(七)て(七)あ(七)の(七)ま(七)の(七)ま(七)
 此(七)碚(七)の(七)ま(七)の(七)ま(七)の(七)ま(七)
 物(七)も(七)あ(七)る(七)ま(七)の(七)ま(七)
 此(七)物(七)も(七)又(七)と(七)考(七)法(七)
 と(七)も(七)え(七)る(七)ま(七)の(七)ま(七)

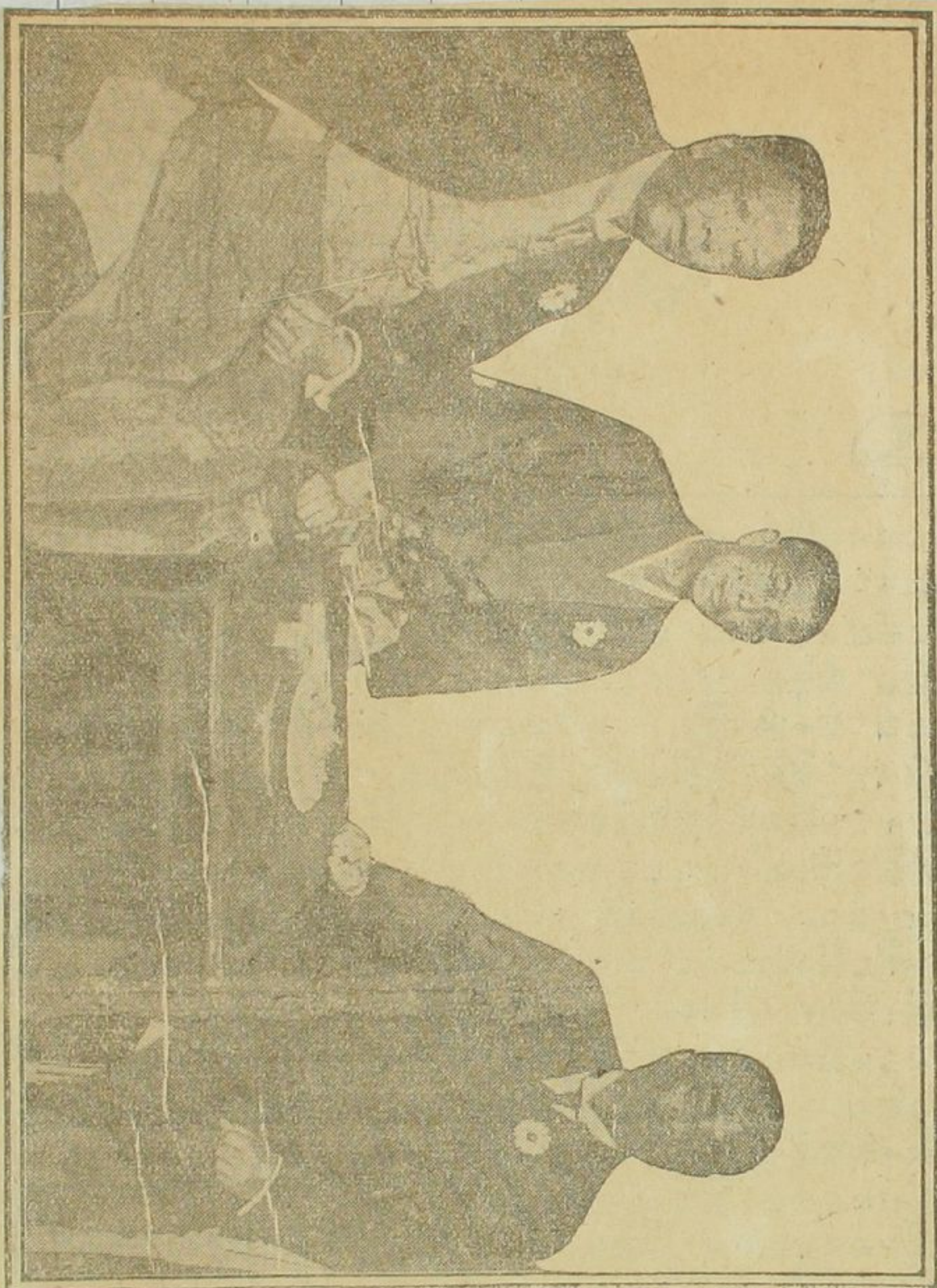
の九月十九日、杉平、頼壽、泊、深井、別荘、竣工、之、行
 大隈、伯、家族、と、共、に、概、一、午、終、の、饗、を、こ、ま、く、此、夕
 校、互、分、特、に、行、の、之、の、長、増、ぬ、と、余、を、主、席、と、し、て、更、迄、に
 閑、し、臨、め、大、多、く、を、染、比、精、養、軒、に、開、く、心、を、こ、ま、く、こ、ま、く
 三、百、五、十、分、半、終、了、す、も、理、音、又、早、稲、田、の、中、心、に
 大、ニ、ン、ト、を、結、ぶ、午、の、終、の、徒、を、多、し、行、の、之、の、長、増、ぬ、と、余、を、主、席、と、し、て、更、迄、に
 四、イ、ン、テ、リ、キ、ヨ、ウ、ル、ン、ア、ド、レ、ス、あ、る、た、に、概、一、の、開、を、こ、ま、く、こ、ま、く
 諸、君、終、了、と、揚、げ、を、こ、ま、く、也、也、の、三、四、の、終、の、徒、を、多、し、行、の、之、の、長、増、ぬ、と、余、を、主、席、と、し、て、更、迄、に
 載、し、ま、く、比、命、の、之、の、長、増、ぬ、と、余、を、主、席、と、し、て、更、迄、に、揚、げ、を、こ、ま、く、也、也、の、三、四、の、終、の、徒、を、多、し、行、の、之、の、長、増、ぬ、と、余、を、主、席、と、し、て、更、迄、に
 會、々、上、り、し、て、行、の、之、の、長、増、ぬ、と、余、を、主、席、と、し、て、更、迄、に、揚、げ、を、こ、ま、く、也、也、の、三、四、の、終、の、徒、を、多、し、行、の、之、の、長、増、ぬ、と、余、を、主、席、と、し、て、更、迄、に
 つ、一、場、の、演、説、を、為、す



讀

日十二月九年四正大

(日八月三年五廿治明)
可認物便郵種三第



同、つて、右、より、天、野、博、士、高、田、文、相、市、島、謙、吉、氏、休、憩、所、に、て、攝、影、
 精、養、軒、に、於、け、る、早、稻、田、校、友、會、三、主、賓

いしき類々感々をえりてうきふすべからざるを味あ
らむも古しわすりていと北條に松をを海に大
家とうと書成せざる能はず

此の偈く松平親壽伯深井の別邸に松を
里を成すに床のりる二大幅の松を山に
帰を親さるるうくの邊に松を
いとよき親の八雅邦氣力旺盛の比
の心より雅邦自力も此の松の書しを再
びゆる難しと松平親壽伯の書す
たる中幅の松を成す此の花松を
る山の謝をを松平親壽伯の書す
尚因をを松平親壽伯の書す

胸に松を床上の大瓶に生けたる者なり
表しそののつらき松をば一寸鉢をる山
とそふ松を松の松骨目と書し
つ瓢箪を松と書し松と書し
らうみと書し松を待つ生花にえ
たる流石に松の松味を松の松松松
と書し松と書し松と書し
今より何人か松と書し松と書し
鉄を余たる松と書し松と書し
生花に松と書し松と書し
と書し

○九月廿日次。物類に松は英世松士の謝恩

余も内儀を早あつて所あり言を隠匿せざる余の心
ちりしと後此にまら殊に創し業くても此の
まきりもとあふ本長入あつてん此も同書故
と余の託名に如やうにうとまを導く一而
て又この政道し確意を右念承のまを余の
興味を早あつて事業を終あつてしつ所以
うして北にまも余も冷然と能はす、殊に此の
衝にあらざるやいふ他は、まもあつてんが
う、勢ひ人後と及び腰一の衝きをう、
撥傍の或と急ぐん、うと急ぐの由い出
北の向ふにありん、と理を余の、需め、
のこし、まらう
(九月廿二日抄記)

分の余の投湖の要候、才一、
の、
在、
湖、
才、
才、
ん、
に、
夜、
こ

著る得んき方面を著書区とす。中七
二巻約十五葉。田乃長十七葉。内と云ふ
（吉原増葉抄終并：因助録一巻。増
紙とも包含し）亦八以上。為し二十葉
田と著書集を著す。亦九二個年分：著
集を著す。亦十。信時大典。中葉未
著るべき定ちる。

○平山を、例の……書意を海、四五の物
物に出し示さん……の一七。鑑考又の……
印の……素……一。場を抽き
欣利將入の乃。茶栗山楷書。 林也
の著：福毛屋山の遠行…… 福毛賢

紙の……傷る……屋山の……也。此者
送……の……栗山
楷體の……栗山
味……此……の……
而……余の……也。九月廿三日
次記福毛屋山栗山同郷の……
○……者……栗山
司……印と……
……印文を……
……の……
……の……
……の……

今と在玉蓋の表を寫し置るに
 織鉢紅の印と表を又人
 紅の日本味印と表を又人
 何れか、一枕秋時、一枕
 印邊中、一枕秋時、一枕
 正字家の刻、一枕秋時、一枕
 一枕秋時、一枕秋時、一枕
 件、此の印邊を刻し置るに
 ぬの、一枕秋時、一枕秋時
 の體、一枕秋時、一枕秋時
 あり、一枕秋時、一枕秋時
 模、一枕秋時、一枕秋時

一片氷
心在
玉蓋



双魚巻



貴物印
無用之用



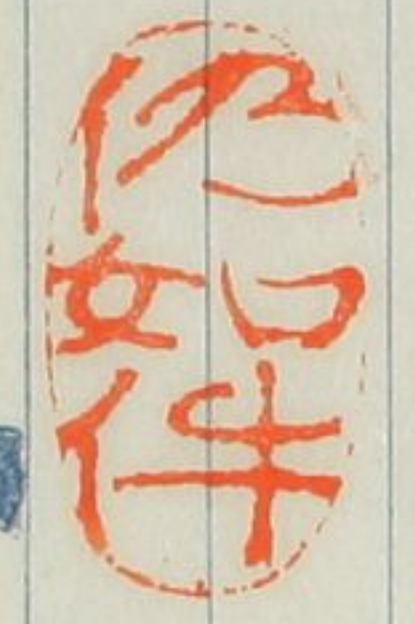
一枕

大正四年
九月九日



一枕

雙魚巻日記



伊豆

○九月廿五日午後学校に於て維持委員会をつまき主として
記念事業を協議す。第四又お七出度、余より大略の
方案を提出す。決定の要項は左の如し

- 一 募金を総額を二十五萬圓とする
- 一 二箇年間に亘り募集を終る
- 一 記念事業の内工費約二十萬圓トス
但し設備費は三萬圓位を要ス
- 一 工事概要左の如し

才一 新築ノ地区に在る建物その他
ニ移築シ同時ニ建物按排ノ従来
不規則ナリシモノヲ整理スル事

才二 在移轉費并ニ従来ノ閲覧室

ヲ移轉建築スルニ約七萬七千
圓を要ス

才二 新築行々ノ建物に着手し
其一半を築キ了る迄
従来ノ閲覧室を
存置スル事 乃ちこれを
工事の才二約とす

才三 最後ニ従来ノ閲覧室を地
、移し前項ノ建築の
下ニ取替
スル事 勿論閲覧室
ヲ移築
建物内ニ開始スル
を得ル事

才四 書庫を増築し
之を備へ

何れも此の批評七出比、大隈伯又曰く獨しと致さず
下も軍務と見ればしるべき、あうしどうしと
是れぬりと無むある即ち人のある、これだとうん
七出を出すこととつて、資力もどううと云ふ
と久之しと云ふとある、この國內はか不換
紙幣をいしく、たのしむる、下は獨しの
内方を現圓の代に代へる、その金を、必換び
あつて外との交易も大体従つて、たゞ、換
びある所々、行商論七苦し、戻り此の獨し
のやせ我慢論とやせ、英米のお銀を獨し
に取つて却つて、往來上便利である、その長
の七は、英米の銀、世界の主銀、無関係と云ふこと

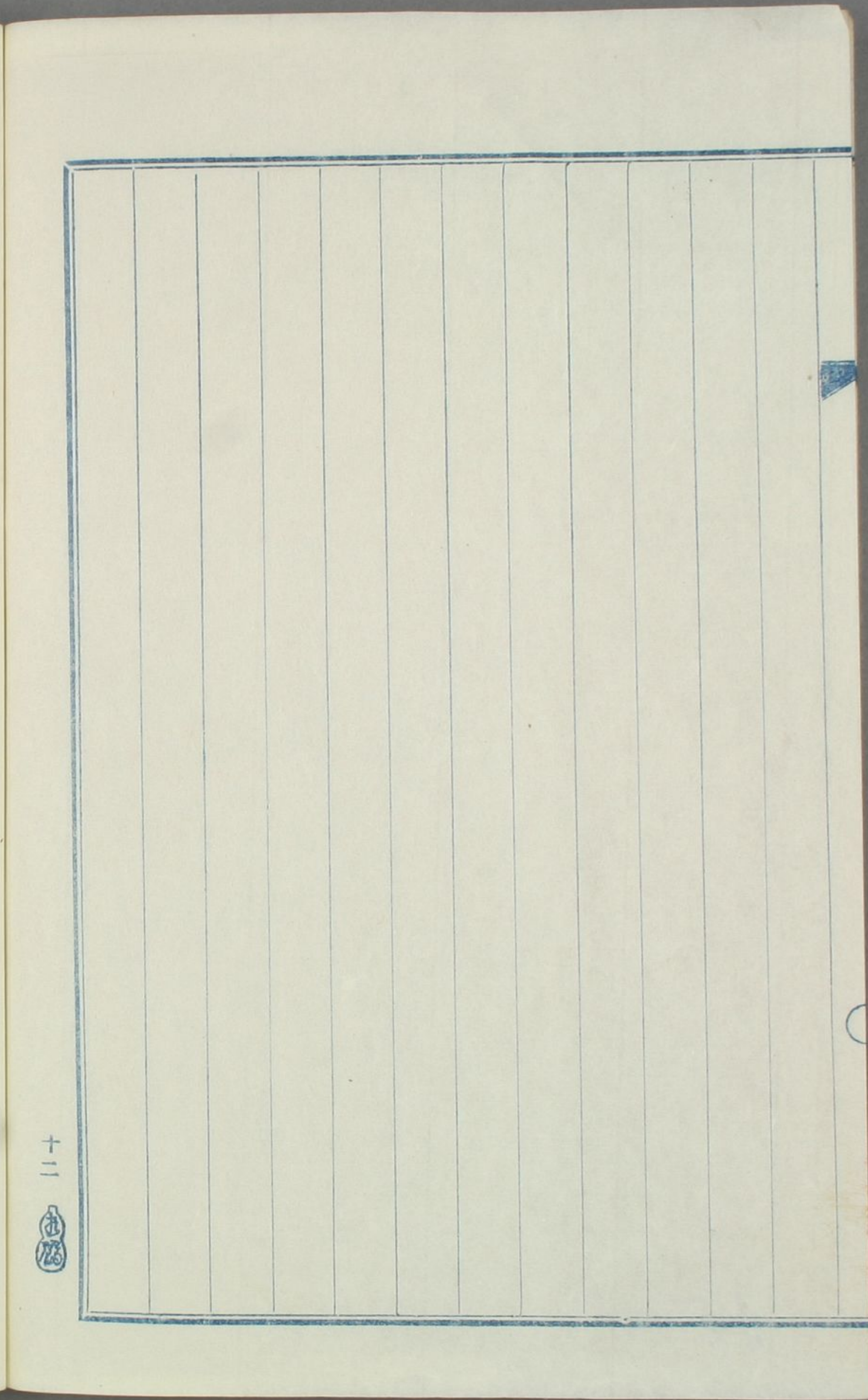
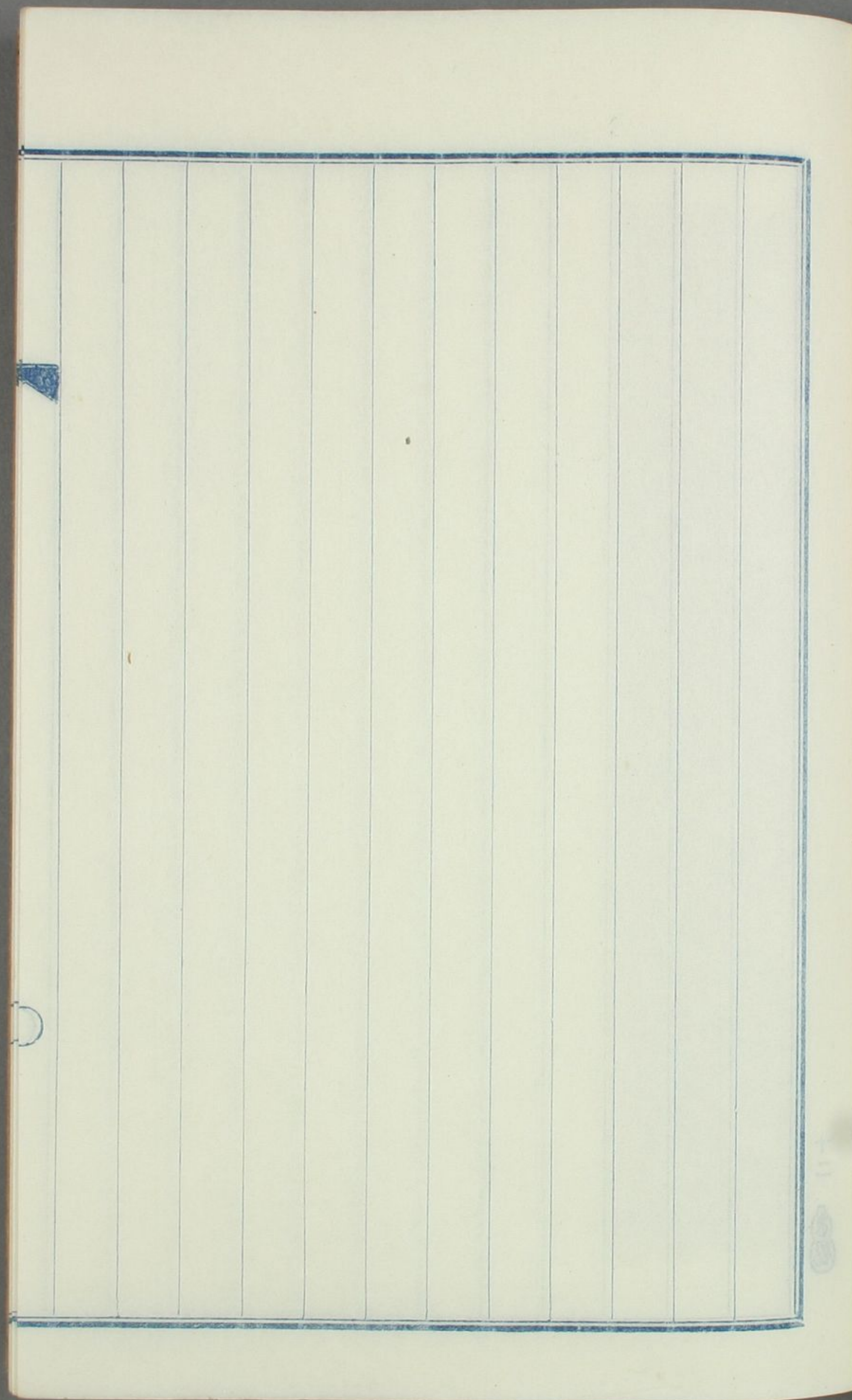
云ふの心ある、まゝと云ふと、福と希大典の、移り伯と
甲、吾等も、さうから、希儀、或しと困つて、此の
束帯……萬歳を唱へ、唱ひ方、而倒る、
笑う、或る……、禮と人を束縛する、この今更
ち、或る……、笑つた……、臨海、甲、吾等、
加、何れと、海航、七、……、海と、何れ、
海、り、吾等、利、加、り、ま、う、あ、る、海、七、
何れ、……、或る、葉、の、ま、を、……、
も、思、ひ、ぬ、あ、う、……、き、る、と、思、ひ、
又、……、き、る、の、契、……、得、ぬ、と、云、ふ
言、海、七、出、比

○九月廿八日、大隈の回書、……、

石を移す所のつら〜漁を〜もせしむる〜物ありし
机上に起る指印を〜一快なり〜山崎隆政高松
の人模刻を〜所とす〜後又他する〜あるを
自愛後刻し〜ありぬ〜物刻し〜を云々〜後。
又〜ものぬ〜悪花〜外に杉原印
謗一快なり印の所在を問ふ〜を〜て
木の字をゆ〜現に珍存し〜とす〜此の又他
五條政三浦井島を記す〜氏死後初を〜
訪へ〜木米也古歌の語二正示す〜皆の
大抵存す〜を〜余の〜
る向付を〜石田子〜を〜と
井島の〜と木米の古歌を〜何れの無款

のよの多しと物京の石本鏡前息崎海と先
より余の先以崎海出るとあり木模を
し〜と〜を〜と深く謝し
いろくの流しの内を〜と〜
ひら〜大かを〜り〜
をゆり〜を〜余も〜
その〜を〜印〜
ハ〜鏡前〜と〜
の糸細工木象眼口〜也
○京都府中下村大丸の連中〜大佛前
の〜や〜此の家と〜
寺前の〜と〜家の跡と〜刻意底

後とんそそうと既に一行のあり雪後そそけにとも
 なるふれこころ用一に代を行きそそそふとこふひあ
 の北極ゆありのふきこつくと大正四年九月二十九日也
 けり荒林者名をふきこつくとふきこつくとけりのおも
 一しうき骨董もふきこつくとけりかへて通る板あ
 のこふきこつくとけりかへて通る板あ
 高きこつくとけりかへて通る板あ
 をじこつくとけりかへて通る板あ
 時代より武家の白物ともあつた古あそびの
 道具も勝地ともふきこつくとけりかへて通る板あ
 多け武家の道具も勝地ともふきこつくとけりかへて通る板あ
 う七味粉の名あつてふきこつくとけりかへて通る板あ



十二
拾

以下全て

白紙

